巻頭言

安価な道路造りへ発想の転換を

常任参与
江頭　泰生

1981年（昭和56年）に創刊された技報も今回で第15号となったが，この間職員の皆さんにより日々の仕事を通じての調査，研究，設計，施工等に関する数多くの論文が投稿され，その時々のホットな課題への挑戦や問題解決の手法などが，克明に残されてきた．

1996年は，３号神戸線を中心とする震災復旧の追い込みの年であったが，役職員一同の昼夜を分かたぬ努力により，当初予定を３箇月も短縮しての全面交通開放となり，当公団の名を再び世に知らしめるとともに，阪神高速道路の重要性を再認識していただく絶好の機会となった．

震災という全く予想をもしなかった出来事に対し，その復旧という全く未経験な仕事を短期間に仕上げることができたのは，職員皆さんの日頃の研鑽と組織力のたまもので，非常時においてもなおかつ斬新な発想と適確，迅速な対応がそれを成し遂げたのであり，それは我々が誇れることではないだろうか．

従来，ともすれば慎重に成りすぎるきらいのあった土木構造物について，短期間で復旧しなければならないという非常時であったにもかかわらず，周到な調査，試験，実験を通じて，複合構造や特殊構造の大胆な採用や免震支承など耐震装置の大規模な導入などを図り，土木技術の新たな進歩に少しなりとも寄与することが出来たと思う．

ところで，昨今の当公団等を取り巻く状況には依然厳しいものがある．行財政改革，特殊法人改革等，従前の制度や慣習に捕らわれることのない，簡易でより効率的な資金運用や組織運営が求められている．

こうした状況下で政府は公共工事のコスト高を是正するため，工事コストの縮減を図る大目標を掲げ，建設省や公団等においても積極的にこれに取り組むこととなった．

我々は，湾岸線等に見られる多くの長大構造物や特殊構造物を造り，また，この度の震災復旧ではより優れた耐震構造物の建設や大規模補強工事などを行ってきたが，これからは高速道路の利用者にとって安全，快適でより安価な道路造りを進めるための発想の転換が必要ではないかと考えている．